

今さら「広場の孤独」を読む

イマゼキ

堀田善衛(1918-1998)の「広場の孤独」(1951)を読んだ。

広場の孤独は発表から既に70年近くが経ち、お世辞にも今日的な作品とは言えない。

しかし、この年の9月にサンフランシスコ平和条約と日米安保条約が結ばれた。ここから日本は「占領下」から「独立国」になったという経緯を踏まえて、その翌月に発表されている広場の孤独を読みたいと思った。そこには「戦後日本の原点」が垣間見えるのではないか。

今回は、そういう話をしてみたい。

1945年3月10日の東京大空襲の後に渡った上海で終戦を迎えた堀田善衛は、帰国後立て続けに作品を発表していくが、1951年11月に発売された広場の孤独で、同年下半期の芥川賞を受賞し、本格的に文壇へと進出していくことになる。

この時期の堀田善衛の作品を見ていくと、「国なき人びと」(1949)、「祖国喪失」(1950)、「歯車」(1951)といった、「私の、特に戦後の生き方そのものに決定的なものをもたらした」「一九四五年二月二十四日から、一九四六年十二月二十八日まで、一年九ヶ月ほどの上海での生活」¹を描き出した上海ものと、南京虐殺やシベリア出兵に取材した「時間」(1955)、「夜の森」(1955)といった侵略戦争ものの二種類に分けることができる。

ところが、広場の孤独は「彼のよくかく上海が舞台ではなくて、朝鮮動乱が起きて、再び戦争のけわしい気流がうず巻いてきた直後の日本」の東京で生きる知識人の「不確定な実存と心理が盛り上っている」様²を描いた、この時期の堀田善衛の作品としては、すこし変わった作品といえる。

この広場の孤独は、1950年7月26日から28日の出来事を32,3歳の新聞記者(ただし、臨時雇い)木垣の視点から描いている一人称の小説である。エピグラフには「Commit [A](罪・過)などを行う、犯す…[B]託する、委ねる、言質を与える、危うくする…[C]累を及ぼす…That will commit us.それではわれわれが危うくなる」と英和辞典がひかれている。

木垣は「この現代社会にはっきりとした確信と信念をもって生きている人を主題にした、現代社会そのものがファクターになった」小説を書きたいとは思っている。しかし、「発言が怖い」と言って書かない。「書いたものは後々まで残る。才能のあるなしは別にしても、こんなふうなどっちに転がるんだか得体の知れない時代には、証拠を残さぬのが賢いということになる」

6月25日に始まった朝鮮戦争では、はっきりなしに国際情勢の情報が飛び交い、国内経済は戦争経済で潤いつつある。会社では英文を訳し、外に出れば外国人記者と共に、活況にわく重工業

¹ 堀田善衛「上海にて」(1959)

² 青野季吉「私の推す新人堀田善衛」朝日新聞1951年10月6日

地帯や酒場をまわり、議論を交わす生活のなかで、日本という国の立場と、その日本人の中での自らの境遇に考えを巡らしていく。

一方、木垣の内縁の妻、京子はスパイをしてしまったことに戦後になってから気がつき、過酷な国際情勢の現場から離れたい、戦争危険地帯である日本から逃れたいと願っている。この夫婦の夢は遠い南米のアルゼンチンへの渡航であるが、2歳の子も抱え、食うのにやっとな木垣の収入では、その願いは叶う見込みもない。しかし、木垣は戦災のあるところならどこにでも現れる自称欧州貴族の商人ティルピッツ男爵にもらった大金を煩悶の末に燃やしてしまう。

居直った木垣が「広場の孤独」と小説を書き出すところで小説は終わる。

煮え返らない態度を示す木垣は、「戦車5台を含む共産軍のタスクフォース」を「敵機動部隊」と訳そうとしている上司に「北朝鮮共産軍を敵と訳すことになっているんですか？それとも原文にエネミとなっているんですか？」と口を挟んでしまったことが上層部で問題になってしまい、外国人記者には自分との会話から「日本の知識人たちは(略)国際情勢の認識にかけては驚くほど感傷的で幼児程度でしかない。或る者は日本の孤立孤独を強調するが、緊迫した情勢、特に朝鮮戦争以後にはどこにも孤立も孤独もありえないことに気づかず、気づいていても敢えて目をつむろうとする」と記事に書かれてしまう。

しかし、木垣は政治的な煮え返らなさこそが信念といえる人物でもあって、「党员」である同僚の明快な論理に違和感を覚えていたし、警察保安隊への転職を決めた上司の誘いにも乗らなかった。

そんな木垣に親近感を覚えたのか、ティルピッツ男爵は「息子」と呼び、彼なりの方法でかわいがり、木垣としては、それはそれで不気味で嫌な感じがしている。ただ、木垣は、もし、もらった大金を使ってしまったら、それこそティルピッツ男爵と同じように寄る辺もない根無し草になってしまう。だから、もらった大金を燃やして、日本に留まることを決める。

「なにもかもが揺れ動き、なにひとつ解決していない—そういう感じであった。その動揺が眼に見えた。眼に見えたものは表現しなければならぬ。それがこのおれの解決の糸口なのだ」という独白の通り、この小説では何も解決しない。

もちろん、解決していないのは小説の中のことだけではない。今日に至るまで日米安保も、朝鮮戦争も、日本の戦後処理も終わっていない。重要なのは、もはや国際情勢は個人がどうこうという次元を超えたすこぶる超人間的なものとなってしまった、ということを70年前のこの時点ではっきりと示しているということではないか。たとえ、どう転ぶかわからなくても、個人が「発言すること」「書くこと」によるCommitがあるだろう。

ところで、この広場の孤独では